

それぞれの世界選手権。
この経験を糧に次なる舞台へ



近年、カットマンは、拾う、という技術だけでなく、「攻撃」「反撃」という技術が必要になってきている。拾うだけでも豊富な運動量が必要であるのに、攻撃という要素を踏まえてプレーしなければならず、1試合で相
当な体力と頭を使う。佐藤はダブルスランキ
ングでは、世界1位、シングルスランキ
ングにおいても世界12位に入っている(6月発表)。

「カットマン」 という特殊な戦型

2017年に入って、ワールドツアー
2大会(タイ・クアアチャ)で優勝。その他の
大会でも、好調なプレーが続いていた。

しかし、攻撃タイプと比べて、カットマン
という特殊な戦型ゆえに、練習法などが
複雑である。

卓球という競技は、点数を競う競技で
ある。ボールの速さ、威力だけを競う競技で
はない。簡単に言ってしまうと、相手より1
本でも多く返球する、相手よりミスを少な
くすれば良いのである。そういう意味では、
カットマンは、相手に喰らいつき、相手より
1本多く返球し、ミスをさせればよいので
ある。

「世界選手権はずっとテレビで観ていま

佐藤 瞳

SATOH
HITOMI
(ミキハウス)

世界で 通用する カットマンに なるために

「思います」

負けず嫌いの性格。佐藤は敗戦が決まる
も、大会が終わるまで、練習会場で練習を
続け、次の目標に向かっていった。

「日本選手の試合を見ていて、まだあの舞
台で試合をしたい、とずっと思っていました。

世界選手権前は、前後左右、守備範囲が
広がるような練習をたくさん取り入れ
ました。その練習は効果的で、1本とい
うか、普段より、2本、3本多く拾えた気がし
ます。

ただ、守備的になりすぎて、攻撃的に
プレーできなかつた。攻撃的といっても、
ドライブとかの攻撃ではなく、ツツキで
あったり、変化を多くしたカットであつた
り、攻撃的なプレーということです。いくら
練習しても、大事な場面で使えない。「心技
体」の心の部分。技術を使える「心」がないと
ダメなんだな、と思います」

卓球人として素晴らしく

13年に、「213位」で、初めての世界ラン

した。私にとって憧れの大会でした。オリン
ピックが一番大きな大会、とすると世界選手
権は2番目に大きな大会。ずっと目標に
していた大会でしたので、ワクワクしてい
ました」

憧れの舞台ということもあつてか、若干の
緊張があつた、と振り返った。緊張感があつ
たものの、調子は悪くなく、しつかりプレー
できた、とも話した。

「実際に出てみてわかつたことなんです
けど、ワールドツアーに出ているメンバーが
ほとんどなのに、世界選手権になると、雰囲気
が違うというか『気持ち』の入り方が全く
違う、と感じました。どんなに点数が離れて
いても諦めないし、1本も捨てない、諦め
ない、という感じ。この経験は、今後の私の
卓球人生において、とても大きなことだと
思います」

シングルスに出場。しかし3回戦でサマ
(ルーミア)に敗れてしまい、日本女子の中
では一番早く敗戦が決まってしまう。

「いつもの自分よりも良い試合ができた
とは思いますが、でも負けてしまった。悔しい
です。しかし、それが今の実力なんです。
世界選手権で感じた雰囲気、負けてしまつ
た事実を絶対に忘れてはいけない。ここから
努力をし続ける。この感覚が大事なんだと

「カットマン」。
台から距離を取り、
相手の強打を何本も拾い、
ミスを誘う。コートを颯爽と動く姿は
美しく、また相手の強打を拾う姿は、
観客の目をくぎ付けにする。
今や日本屈指のカットマン、
佐藤瞳が
世界選手権初参加を
振り返る。

キング入り。そして17年4月には一桁の
【9位】に。わずか4年ちよつとの時間である
が、急上昇を果たしている。

「世界ランキングも上がり、たくさんの方
が応援、注目してくださっているとと思いま
す。ですから、結果だけでなく、立ち居振る
舞いというか、私生活も気にしています。
卓球も素晴らしく、人間的にも素晴らし
い。そうしていきたいと思っています。

私はカットマンという戦型。世界でいう
なら少ない戦型です。また、優勝を狙える
位置にもいると思うので、自分を信じて、
指導者を信じて、練習を信じて、自分らし
さを確立して、東京オリンピックでは、女子
シングルス初となるメダルを取りたい、と
思います」

電話取材であつたが、電話からでも彼女
の意志の強さが伝わってきた。「練習を信じ、
指導者を信じ、仲間を信じる」。そして最後
に自分を信じる。

自分にしかできないプレーを確立できた
時、新しい「世界」が手に入るだろう。